

ジョイスと食の記述
—「ライストリュゴネス族」に見られる健康志向—

Joyce and the Description of Food
His Inclination toward Health in “Lestrygonians”

城所 秀子

Abstract

James Joyce wrote *Ulysses* (1922) as the third of his main works. It consists of 18 episodes and “Lestrygonians” is the eighth one. In Homer’s *The Odyssey*, which is a Greek poem, one can find the name “Lestrygonians”. In the poem, the Lestrygonians are cannibals, but in Joyce’s *Ulysses* there are no such creatures. Instead, the Lestrygonians are people who are very gluttonous. Joyce uses only the frame of Homer’s for his *Ulysses*. In “Lestrygonians”, the main character, Leopold Bloom, is described, along with his words and deeds on the eighth of July, 1906, at around 1 o’clock in the afternoon in Dublin. Compared with his first work, *Dubliners* (1914), Joyce’s description of food greatly changed. One thing is that this episode is full of various names and expressions concerning food. Second is that Joyce evaluates food from the point of view of being good or bad for one’s health, and furthermore, he discusses issues of safety in food. In this paper I will make clear why Joyce expresses so much about food and describes the effects on health, particularly in “Lestrygonians”.

Keywords: 健康、外食、菜食主義、食の安全

はじめに

『ユリシーズ』(*Ulysses*, 1922)¹における第 8 挿話「ライストリュゴネス族」(“Lestrygonians”)は、物語の主人公の 1 人であるレオポルド・ブルーム(Leopold Bloom)

が、1904 年 6 月 16 日午後 1 時頃にダブリンでどのように過ごしたのか、ブルームが取った行動に沿って描かれた挿話である。

この挿話には、食物そのものと食に関連する語を使った直喩、隠喩、諺などが、至る所にちりばめられている。「テレコマス」(“Telemachus”) から始まる 18 の挿話で構成されている『ユリシーズ』の中でも「ライストリュゴネス族」は、特に食の記述に拘って書かれた挿話と言え、食に対しジョイスが高い関心を持っていたことが窺える。

また、「ライストリュゴネス族」における食の記述の中でジョイスは、健康に良い悪いといった、食物が健康に与える影響の観点から食物を評価しており、更に食の安全性にまで言及した記述も散見する。『ユリシーズ』以前に書かれた、15 の短編から成る『ダブリンの市民』(*Dubliners*, 1914) 最後の短編、「死者たち」(“The Dead”)にも比較的長い食の記述がある。ここでは御公現の晚餐料理が描かれているが、『ユリシーズ』に見られるような言及はなく、ジョイスの食に対する関心の変化が見られる。

ジョイスは、なぜこのように食に拘って「ライストリュゴネス族」を書いたのだろうか。また、食に関わる記述が、身体への影響や安全性にまで及ぶ健康志向へと変化したのは、どのような理由からなのか、ジョイスやジョイスと関わりのある人々の伝記、書簡、書籍などから探していきたい。

1. 『ユリシーズ』と「ライストリュゴネス族」

『ユリシーズ』は、アイルランド人の作家ジェイムズ・ジョイス(James Joyce, 1882-1941)によって書かれた小説である。物語は、1904 年 6 月 16 日のたった 1 日だけのダブリンに住む 3 人の主人公たちに起きた出来事を描いたものである。3 人とは、文学青年で臨時教師をしている 22 歳のスティーブン・ディーダラス(Stephen Dedalus)とフリーマンズ・ジャーナル(*The Freeman's Journal*)の広告取りで、ハンガリー系ユダヤ人の血を引く 38 歳のレオポルド・ブルーム、そして彼の妻である 33 歳のソプラノ歌手モリー・ブルーム(Marion Bloom)である。

全体の構造は 18 の挿話から成り、ホメロス(Homer)の『オデュッセイア』(*The Odyssey*)

から借用した名称をそれぞれの挿話の表題に当てはめ、物語が繰り広げられる。場所や時刻、体の器官、学芸、色彩、象徴などが各々の挿話で対応しているが、内容的には『オデュッセイア』とは直接結びついていない。

3人の主人公の1日は、それぞれ次のように描かれている。まず、ブルームは、妻の不貞行為に心を痛めているがそれを黙認している。妻のモリーは、夫に不満を持ち、不義を犯しながら夫と愛人を天秤にかけている。またスティーブンは、マーテロ塔に住む2人の同居人と折り合いが悪く、塔を出たいと考える。酒に酔った挙句、イギリス兵に殴り倒される。『ユリシーズ』の物語は、それぞれ3人の主人公たちが送る日常生活の断片を中心にして、ダブリン(Dublin)の様子やそこで暮らす人々の様子を生き生きと描いた作品である。

『ユリシーズ』8番目の挿話「ライストリュゴネス族」では、午後1時10分頃から2時10分頃までのダブリンの街を歩き回るブルームの様子が描かれている。彼は新聞社を出て、オコネル通り(O'Connell Street)のグレアム・レモン菓子店(Graham Lemon's)の前から広告の仕事のためキルデア通り(Kildare Street)の国立図書館へと向かう。道中ブルームは、妻と出会った頃のことを思い出すが、妻の不義を想像すると憂鬱な気分になってしまう。デヴィ・バーン(Davy Byrne's pub)の店で昼食を取った後、国立図書館に行くのだが、建物の前で妻の不倫相手であるブレイゼス・ボイルン(Blazes Boylan)の姿を偶然見かけ、ひどく動揺してしまう。

ホメロスの『オデュッセイア』では、「ライストリュゴネス族」は人食い人種のことを指す。船旅の途中でテレピュロス(Telepylos)という町に寄り、そこで王アンティパテス(Antiphas)の娘の言うことを鵜呑みにしたオデュッセイアの部下たちの多くは、人食い人種に食べられてしまう。ジョイスの『ユリシーズ』第8挿話は、昼食時のブルームの行動や心情を中心に描かれており、食物に惹かれ空腹に負けてしまう人々の様子は、人食い人種ライストリュゴネス族に部下たちが食べられてしまう『オデュッセイア』の一面を想起させるようになっている。

2. 食に関わる多様な表現

「ライストリュゴネス族」は、食に関わる記述が非常に多く、食物の種類や表現も多様であることに驚かされる。『ユリシーズ』以前に書かれた小説である『ダブリンの市民』や『若き芸術家の肖像』における食の記述で、『ユリシーズ』との顕著な違いは、食の記述の量的な多さと表現の多用さであり、また、健康に与える影響という観点から食物を評価し、中には厳しい目が注がれている食物もあるという点である。次に直喩などを検討してみる。

A **sugarsticky** girl shovelling scoopfuls of creams for a christian brother. (L: 1)²

「砂糖のように甘い少女が、修道僧のためにクリーム菓子を何杯も匙ですくっている。」

‘sticky’は俗語で‘Sinn Fein’党員の綽名も指す。文字通りだと「砂糖のように甘い‘Sinn Fein’党員」ということだろうか。

Proof of **pudding**. (L: 42-3)

「論より証拠」

諺で「プディングは食べてみなければ分からない」ということから「論より証拠」という意味。

And still his **muttonchop** whiskers grew. (L: 360-1)

「それでも末ひろがりの頬ひげは伸びる。」

‘muttonchop’はあばら骨付きの羊の肉片のことで、‘muttonchop whiskers’は「羊の肉片の形をした頬髯」の意味。

Head like a prize **pumpkin**. (L: 396-7)

「ご褒美のかぼちゃみたいな頭」

Gammon and spinach. (L: 464)

「戯言と出鱈目」

直訳は「ベーコンとほうれん草」の意味だが、それぞれ「戯言」と「出鱈目」という意味もあり、本挿話では後者の意味で使われている。

Kerwan's **mushroom** houses built of breeze. (L: 491-2)

「ダブリンの建築業者カーワンが建てたにわか作りの家々」

‘mushroom’ には、形容詞的に「キノコのように急成長する」という意味もある。

The patriot's banquet. Eating **orangepeels** in the park. (L: 516-7)

「愛国者たちの豪華な食事 公園でオレンジの皮を食べる」

フェニックス公園で行われた愛国者たちの集会で、集まった人々は親英派のオレンジ党やアイルランド警察の創始者ロバート・ピールに反発する意思を表してオレンジを食べた。ロバート・ピールの綽名は、‘orangepeel’ オレンジの皮だった。(G)³

All the **beef** to the heels were in. (L: 617-8)

「贅肉のたっぷり付いた足が、そろそろ歩いて来た」

太い足のことを牛肉の比喩で表わしている。

Bubble and squeak (L: 724-5)

「キャベツと肉の炒め物」

文字通り「泡と悲鳴」という意味もかけている。

God made **food**, the devil the **cooks**. (L: 761-2)

「神が食物を創り、悪魔が料理人を作った。」

イギリスの作家ジョン・テイラー (John Taylor) の「神は肉を遣わし、悪魔は、料理

人を遣わす」をもじった言葉である。⁴

3. ジョイスの健康と家庭生活

「ライストリュゴネス族」における食の記述で、健康に良い悪いと食物を評価している記述が幾つかある。ジョイスの健康面での変化が、作品に影響を与えていることはないのだろうか。『ユリシーズ』執筆当時のジョイスの健康状態を、リチャード・エルマンの『ジェイムズ・ジョイス伝』(Richard Ellmann, *James Joyce*, 1982) とブレンダ・マドックスの『ノラ』(Brenda Maddox, *Nora: The Real Life of Molly Bloom*, 1988) を中心に探っていくことにする。

ジョイスが『ユリシーズ』を書き始めた 1914 年に第 1 次世界大戦が勃発した。彼は 32 歳になっていたが、この頃の彼の健康状態は非常に悪かったと思われる。特に目の疾患については最悪で、手術を受けなくてはならない状況にまで悪化していた。ジョイスの患った主な病と「ライストリュゴネス族」の執筆当時の状況を時系列に表す。

1907 年 (25 歳) リュウマチ熱の発作があった以後も眼疾を患う。

1914 年 (32 歳) 『ダブリン市民の人々』が出版される。

『ユリシーズ』を執筆し始めるが、中断して『亡命者たち』(*Exiles*, 1918) を書き翌年完成させる。

1917 年 (35 歳) 2 月に通りを歩いている時に、突然緑内障の発作に襲われ激しい痛みのため 20 分程歩けなくなってしまう。

8 月にも緑内障の発作に襲われ、ひどい痛みのため直ぐに手術を受ける。

1918 年 (36 歳) 4 月には、3 つの挿話「カリプソ」(“Calypso”)、「食蓮人たち」(“Lotus Eaters”)、「ハデス」(“Hades”)を完成させる。

夏、虹彩炎⁵のため 9 週間にわたって寝たきりとなりノーラの看病を受ける。

10 月までに『ユリシーズ』の 2 つの挿話、「アイオス」(“Aeolus”)

と「ライストリュゴネス族」を完成させる。

「ライストリュゴネス族」を書き終える前に、ジョイスは目の病との壮絶な闘いがあり、この病を抱えながら執筆活動が続けていたのである。1914年に出版された『ダブリンの市民』では、『死者たち』だけでも31回、全短編通して100回近く‘eyes’という言葉が使われている。この‘eyes’の使用頻度とジョイスの眼病とは無縁ではないだろう。

また、『若き芸術家の肖像』(*A Portrait of the Artist As a Young Man*, 1916)の最初の童謡部分に綴られている‘lemon platt’というレモン味のするねじり飴は、切り口が金太郎飴のように丸くて円の周りが瞼のように白く、まるで人の瞳を想起させるような食べ物である。この菓子を「ライストリュゴネス族」の冒頭部分にも綴っていることから、眼病を患っていたジョイスが、読者に‘lemon platt’を病の象徴として仄めかしているようにも思える。「ライストリュゴネス族」でも‘eyes’は、卵を比喻に用いて‘Poached eyes on toast’「半熟卵とトースト」をもじった‘Poached eyes on ghost’(L: 508)に、また‘His parboiled eyes’(L: 606)「酒を飲みすぎて充血している目」の表現に使われている。眼病の他にも、戦争から逃れるためスイスのチューリヒ(Zurich)に移居した頃、気候の違いからリュウマチや扁桃炎、大腸炎を患い、神経衰弱にも苦しんでいた。病に冒されたジョイスが、健康に良い或いは悪い食物に拘り健康志向へと変化していった背景には、彼自身の健康への不安があったからである。

この年の1915年から様々な人々から経済的援助の手が差し差し伸べられるようになる。まずパウンド(Ezra Pound, 1885-1972)とイエイツ(William Butler Yeats, 1865-1939)の尽力により英王室文学基金(The Royal Literary Fund)から助成金をもらい、更に2年後には、ウィーヴァー(Harriet Shaw Weaver, 1876-1961)からも援助を受けるようになる。これらのお陰で、健康を害したジョイスは、家族と共に路頭に迷わなくて済んだのであるが、家計は相変わらず豊かとは言えなかった。

ジョイス家では、どのような食生活を送っていたのだろうか。彼の家庭生活上で殊更目を引くのは、外食の多さである。その理由として考えられるのは、度重なる転居、台所の整っていない住環境、外国生活でのノーラの言葉の壁や家事嫌いなどが挙げられるで

あろう。1904年にダブリンを去った22歳のジョイスと20歳のノーラは、オーストリア帝国領のポーラ(Pola)に行き、ジョイスは会話学校の教師になる。それから1922年に『ユリシーズ』が出版されるまでの18年間、トリエステ(Trieste)(当時はオーストリア領)、イタリアのローマ(Rome)、トリエステ、スイスのチューリヒ、トリエステ、フランスのパリ(Paris)と転々と住居を変えることになる。

落ち着かない生活の中でジョイスが執筆活動に専念できたのは、カフェやレストランを利用していただけである。妻のノーラも、孤独の中で1日中書き物をしているジョイスが人の中に出ていくことを望んだ。⁶ 外食は、ジョイス自身だけでなく家族皆ですることとも度々で、レストランで正装をした家族が写っている写真が何枚も残されている。

このように家族で外食をするのは、現在ではそう違和感を持たれないが、当時、ジョイスが得る程度の収入で、外食を頻繁にする家庭はあまり無かったようである。⁷ それは単純に食費がかかり過ぎてしまうからだだった。ジョイス一家がポーラに住んでいた頃、暖房もない部屋に住んでいた彼らに、空いていた部屋を提供してくれたベルリッツ・スクール(Berlitz School)校長代理であるフランチーニ夫妻(the Francinis)は、ジョイスと同じ収入で暮らしていたが、毎晩外食するジョイス一家に付き合う余裕がなかった。⁸ 当然、ジョイスは、経済的に困ることが度々起きていたが、妻のノーラも節約をして家計を助ける賢い主婦ではない。弟のスタニスロース(Stanislaus Joyce, 1884-1955)への書簡には、生活に困窮して金銭的な援助を求める文面が何か所もある。⁹

それでもジョイス家の外食の習慣は続けられていく。第1次世界大戦が終わった後、ジョイス一家はパリに転居するのだが、リュニヴェルシテ通りに住居があった頃、近所のレストランで家族と共に食事をしていた。その時の様子を彼は書簡の中で、次のように書いている―「私たちは大衆的なレストランで食べざるを得ません。昼食も夕食も。食材はひどく、料理法はさらにひどく、ワインは最悪です。」¹⁰

ジョイス一家は、パリでヘミングウェイ(Ernest Hemingway, 1899-1961)と親交を結ぶようになるが、1922年の3月にシャーウッド・アンダーソン(Sherwood Anderson, 1876-1941)に宛てたヘミングウェイの書簡には、ジョイスの苦言を覆すような記述がある。

Meantime the report is that he and all his family are starving but you can find the whole celtic crew of them every night in Michaud's where Binney [Hadley] and I can only afford to go about once a week. (SL, 62)

ヘミングウェイでさえ週に1度しか行けない高級レストランに、ジョイスは毎日、しかも家族皆で食事をしていたのである。事實は、ジョイスが嘆いていたこととは大分異なっていたのである。ノーラもこの頃には、繊細な舌の持ち主になっていた。

外食の習慣はジョイスの飲酒癖を増長させ、栄養バランスの悪さが健康に害を及ぼしたとも考えられるが、家庭外で食事をするのが、食に対する知識や関心を高め、交流関係を広げることに繋がり、更には洗練された味覚の持ち主へと彼や家族を変えていく要因になったとも言えるだろう。

4. 食に警鐘を鳴らす

「ライストリュゴネス族」では、ジョイスが健康に良い、と言っているマラガ産レーズンや暖かい新鮮な動物の血などより、悪いと評価している食物の方が数的にずっと多く、食の安全性を疑い危惧していると思われる記述も散見する。それは、菜食主義者の食事、子どもたちが好む甘い菓子、じゃがいもとマーガリンだけの食事、塩漬けの燻製鯿、牡蠣などである。

4 - 1. 菜食主義者の食事

菜食主義者の食事については、ジョイス自身の食体験が語られている。世間の人々には健康に良いと言われているが、ジョイスにはどうだったのだろうか。

Coming from **the vegetarian**. Only weggebobbles and fruit. Don't eat a beefsteak. If you do the eyes of that cow will pursue you through all eternity. They say it's healthier. Windandwatery though. Tried it. Keep you on the run all day. Bad as a bloater. Dreams all night. Why do they call that thing they gave me

nutsteak? Nutarians. Fruitarians. To give you the idea you are eating rumpsteak.
Absurd. Salty too. They cook in soda. Keep you sitting by the tap all night.
(L: 534-41)

(ブルームの目の前を自転車で通り過ぎて行く男女が、) ベジタリアンレストランから出て来た。野菜類や果物だけ。ビフテキは食べてはいけない。もし食べようものなら、牝牛の目が永遠に追いかけてくる。皆は健康に良いと言う。けれども、おならと小便ばかりだ。一度試してごらん。一日中下痢をしっぱなし。塩漬けの燻製鯨と同じ位ひどいから。一晩中夢を見る。俺に食べさせたあれをなんで木の実ステーキと呼ぶのだろう？ 木の実主義者。果物主義者。尻肉ステーキを食べる気分を出すつもりかな？ ばかばかしい。それに塩気がききすぎているし。炭酸ソーダで調理する。だから一晩中蛇口のそばに座わらされる羽目になるよ。

菜食主義者たちの食物は、ジョイスには健康に良いどころか健康を害する食物だったようである。‘vegetarian’という言葉は、『ダブリンの市民』では使われておらず、『ユリシーズ』では、「ライストリュゴネス族」の挿話のみに記されている言葉である。日本語では「菜食主義者」と訳されているが、語源は野菜を表す‘vegetable’の語尾に人を表す‘tarian’を付けた造語である。健康や道德、宗教上の理由から肉を食さない人々のことを指す。

このような肉食を避ける人々は、古代インドや古代ギリシアに既に存在していたが、今日でいう「菜食主義」は健康上の理由というより、むしろ食肉を得るために動物を殺傷する、という倫理的な面から支持されている。菜食主義者を‘vegetarian’と呼ぶようになったのは、OED 第 2 版によると、1839 年に出版されたイギリス人女性フランシス・アン・ケンブル (Frances Anne Kemble) の著書 *Journal of a Residence on a Georgian Plantation* においてからである。ケンブルも著書の中で、動物の生命を奪い、虐待とも

思われる行為が、日常生活で何の憐憫もなく行われているという事実、に、激しい嫌悪感を持ったと綴っている。

「ライストリュゴネス族」には、もう 1 か所‘vegetarian’という語が使われている。ここでは家畜市場における家畜たちの生々しい状況が描かれている。ブルームは、新聞の広告取りという職に就いているとされているが、以前に家畜商で働いた経験があり、家畜市場の臨場感のある描写はブルームの過去の職業体験に基づくものと想像できる設定になっている。

中世から近世初期のヨーロッパでは、食用に動物を屠殺する光景は、都市でも農村でも公衆の面前で日常的に目にすることができた。19 世紀になると屠殺場が徐々に姿を隠すようになる。それは特に都市に住む人々の動物の屠殺に対する感受性の変化が起きてきたためである。既にイギリスでは 17 世紀末から菜食主義運動がかなり激化し、この世紀の半ばごろには、動物愛護の観点から菜食主義を取る人々がいた。1813 年のパーシー・ビッシュ・シェリー(Percy Bysshe Shelly)による『自然食擁護』(*Vindication of Natural Diet*) の発表や 1847 年にマンチェスター(Manchester)に創設された最初の菜食主義者協会(The Vegetarian Society)によって、菜食主義はヨーロッパ諸国の間で急速に広まっていたのである。¹¹

ジョイスには菜食主義者の友人が何人かおり、弟スタニスロースに宛てた書簡で次のように書いている。“So damn Russell, damn Yeats, damn Skeffington, damn Darlington, damn editors, damn free-thinkers, damn vegetable verse and double damn **vegetable philosophy!**” (SL,14)¹² ラッセル(Russell)とスケフィントン(Skeffington)は、ユニヴァーシティー・カレッジ・ダブリン(University College, Dublin)時代の学友で2人とも菜食主義者であった。1903 年ジョイスが 21 歳の時に書かれたこの書簡には‘vegetarian’という言葉を使わず、‘vegetable philosophy’と記されているが、これは‘vegetarianism’と同義と考えてよいだろう。大学を卒業したばかりのジョイスは、友達に感化されることなく、既にこの時菜食主義を拒否していたと思われる。動物愛護の精神には共感するが、菜食主義者の食事はお免だ、というところだろう。

4 - 2. 砂糖

「ライストリュゴネス族」の最初のパラグラフでジョイスの批判の目はまず、子どもたちのおやつに向けられる。“Pineapple rock, lemon platt, butter scotch. A sugarsticky girlshovelling scoopfuls of creams for a christian brother. Some school treat. **Bad for their tummies**” (L: 1-3). クリスチャン・ブラザーズ スクールというのは、17 世紀に設立されたカトリックの教職会が経営する学校のことで、貧しい家庭の子どもたちの職業教育を行っていた。その学校で子どもたちに配られる菓子の話である。

‘tummy’というのは、‘stomach’の幼児語で、甘い砂糖が沢山使われている菓子は、子どもたちの「ぼんぼんに悪い」ということである。現代では、砂糖は胃に悪いというより寧ろ歯に悪いと言いたいところである。17 世紀頃からイギリスでは上流階級の「宴会料理」に出されるプディングやペストリー¹³などに大量の砂糖が使われるようになったことから、やがて庶民の間にも砂糖への偏愛が高まっていったようである。この当時高級品だった砂糖は、19 世紀の半ば頃になると、貧しい労働者向けに故意に粗悪品を混ぜて、品質を落とすことがされ、他にもコーヒー、ココア、胡椒なども同様なことが行われていた。これらの悪質な方法は、ドイツ人のフレデリック・アクム(Frederic Accum)やフリードリッヒ・エンゲルス(Friedrich Engels)などの著書によって明らかにされていったのである。¹⁴

4 - 3. ジャがいもとマーガリン

ブルームがオコネル橋 (O’Connell bridge) に向かう途中で出会った、ぼろぼろの服を着て栄養状態の悪そうな少女の食生活は、ジャガイモとマーガリンだけの食事だろう。やがて成長の過程で少女は健康を損ねることになるのではないかと、ジョイスは懸念している。

Good Lord, that poor child’s dress is in flitters. Underfed she looks too. **Potatoes and marge, marge and potatoes.** It’s after they feel it. Proof of the pudding. Undermines the constitution. (L: 41-43)

「ジャガイモとマーガリンの食事では体がだめになる。」

‘potato’ と ‘marge’ を反復して繰り返し、ジャガイモとマーガリンの 2 語を強調していることから、ジョイスの心情が読み取れる。マーガリンは 1870 年頃に発明され、価格がバターの半値と手頃であることから、バターの代用や併用食品として低所得層の人々に愛用された。しかし、当時のマーガリンにはビタミンが含まれておらず、健康に悪い食品とされていた。¹⁵ ジャガイモもマーガリンも貧しい人々が日常的に口にしていた食物であり、食物摂取の偏りが健康被害を引き起こすことをジョイスが危惧していることが窺える。

4 - 4. 缶詰や瓶詰食品

物語の中で、ディグナムと妻のモリーとの情事の際に食した、プラムツリー社の瓶詰肉のことをブルームの言葉を通してジョイスは酷評している。

Potted meats. What is home without **Plumtree's potted meat**? Incomplete. What a stupid ad! . . . With it an abode of bliss. Lord knows what concoction. Cauls mouldy tripes windpipes faked and minced up. Puzzle find the meat. (L: 742-52)

妻の不貞行為を許しているブルームが、瓶詰肉に八つ当たりをしているとも取れるが、羊膜やカビの生えた肺臓、気管など何でも細かく刻んで混ぜてしまえばだれにも分からないだろう、というのはあり得ないことではない。この頃は、まだ冷凍設備がなかったため食中毒も頻繁に起きていた。¹⁶

20 世紀初頭に労働者階級の人々が好んで利用した缶詰ミルクは、牛乳ではなく砂糖とトウモロコシ粉で作られた粗悪品で、乳児に与えるのは不適とされていた。缶詰や瓶詰、保存用食品は、安価で調理の手間が省けるという理由から人々に利用されるようになってきたが、食の安全性についてはかなり疑わしかったようである。

4 - 5. ユダヤ教の食物コーシャ

ユダヤ教の食事規定によって料理された食べ物のことをコーシャ ‘Kosher’ という。ブ

ブルームの父親は、ユダヤ系移民なので、彼の息子であるブルームに取ってもコーシャは馴染み深い食物だっただろう。この食物についてジョイスは次のように言っている。

“**Kosher.** No meat and milk together. **Hygiene** that was what they call now”(L: 752). ユダヤ教の掟には、宗教的に不浄な食べ物が細かく記されており、肉と乳製品は一緒に食べるはいけない、というのもその1つであるが、台所用品から食器まで区別しなくてはならない程その制限は厳しい。¹⁷ここでジョイスはコーシャのことを、「今で言うところの食品衛生」と言い換えている。しかし、‘hygiene’という言葉は、ユダヤ教で言う清浄な食物の同義語、というより寧ろ健康維持のために食品を衛生面で予防すること、という意味で使われる言葉である。食物に向けられた新たな視点が、社会の中で生まれてきていることがこの言葉を通して分かる。

4 - 6. 食に麻痺した人々

安全性が危惧され健康に悪影響を及ぼすと考えられる食物を日常的に何の問題意識も持たずに食しているのは、食に関心が低く知識や情報も乏しい貧しい人々である。バートンレストラン(The Burton restaurant)で昼食をむさぼり食べる人々の様子は、ただ空腹を満たすためだけで食事を楽しむといったことから程遠い醜悪な場面である。貧しい人々に支給される1ペニーの夕食は、ナイフもフォークも鎖で取り付けられており、プロテスタントに改宗したと称して軍隊行進に加わった人々には、1ペニーのパンが与えられた。¹⁸貧民救済という大義名分によって、食物の施しと引き換えに、改宗や軍隊への協力などを強いてアイルランドの植民地化をさらに強固にしようとするイギリス政府の企みが見え隠れしている。しかし、相変わらず麻痺したアイルランドの人々の中には、そのようなイギリス政府の植民地政策に関心で危機感すら持っていない者もいる。ジョイスは無知なアイルランド人たちに警鐘を鳴らしているのである。

おわりに

20世紀初めのイギリスやフランスでは、鉄道や自動車などの交通手段の発達によって食料の安定供給が可能になった。それは、これまでのような食物確保の問題から食物の

質や衛生面も含めた安全性の問題へと社会の人々の意識を変化させる要因になったのである。この時代には、マーガリンが発明され、缶詰や瓶詰も店に出回り、ビタミンも発見されている。¹⁹今では当たり前になっている、ホテル内で食べられる食事も提供されるようになり、レストランのセットメニューも考え出され定着していったのもこの頃であった。

ジョイス自身は、『ユリシーズ』執筆当時、病との闘いから健康と密接に関わる食について健康志向へと変化したのは当然だったと言える。また、社会の様々な変化が、健康的な食生活のために必要な食の安全性や衛生面での改善などへと人々の意識を高める要因になったのである。その主な情報媒体となったのが出版物で、人々の識字率が上昇するに従い、出版される書籍や雑誌が増加し、大衆向けの婦人雑誌なども数多く出版されるようになっていた。『ユリシーズ』第13挿話の「ナウシカ」(“Nausicaa”)には、婦人雑誌を真似た文体で書かれているところもある。²⁰

それらの状況から、ジョイスは、食に対する人々の意識の変化を敏感に感じ取り、食を取り巻く現状に問題意識を持つことができたのである。日常生活では、レストランやカフェで食事をする際に人々との会話から多くの情報を得たであろうし、実際に食物を味わうことで、どの食物が健康に良く悪いかが、体験を通して確実に把握できたであろう。だが、残念ながら飲酒の習慣は家族にも止められず、健康に悪影響を与えたようである。

第8挿話「ライストリュゴネス族」は、様々な食物や食に関する語を用いて描いているのと同時に、食物と健康への関わりや食の安全性にまで踏み込んだ挿話であると言える。それは、社会生活の一場面を具体的に描くことで、食に無関心な人々に問題意識を持たせたい、というジョイスの意図があったからである。

注

¹ テキストは James Joyce, *Ulysses*. edited by Hans Walter Gabler with Wolfhard Steppe and Claus Melchior (New York: Random House, 1986) を用いた。尚、“Lestrygonians”か

- らの引用は、略号(L)に続けて本挿話を通して付けられた行数で示している。その他の作品は、括弧内に略語で示した作品名、ページ数という形で示した。
- 2 本論における太字、日本語訳はすべて筆者による。
- 3 略号(G)は、Don Gifford, *Ulysses Annotated* (University of California Press, 1988) を示したものである。
- 4 “God sends meat, and the Devil sends the cooks.” がテイラーの言葉である。
- 5 虹彩炎は、眼球の角膜と水晶体との間にあって、光の強さを調整する血管と色素に富んだ円盤状の膜に生じた炎症。ふつう目の色と言われるのは虹彩の色のこと。
- 6 Maddox, Brenda, *Nora: The Real Life of Molly Bloom* (Boston: Houghton Mifflin, 1988, p.56) からの引用である。
- 7 *Nora*, 181 を参照されたい。
- 8 *Nora*, 56 を参照されたい。
- 9 1906 年 10 月 9 日付のスタニスロース宛の書簡など、経済的援助が受けられるまでの書簡に度々記されている。
- 10 1920 年 11 月 17 日付のジョン・クイン(John Quinn)宛ての書簡でジョイスは次のように述べている。“We are obliged to eat in a popular restaurant, both lunch and dinner. The food is bad, the cooking worse and the wine is worst of all” (*Nora*, 178).
- 11 *All Manners of Food*, pp.304-10 を参照。ここでは、道徳的理由から肉食への嫌悪が人々の間で高まっていった経緯について詳しく論じている。
- 12 1903 年 2 月 8 日 パリから送ったジョイスの書簡である。
- 13 パイやタルトなど小麦粉を生地に使った焼き菓子のことである。
- 14 アクムは『食品の粗悪化と食中毒概論』(*Treatise on the Adulterations of Food and Culinary Poisons*, 1820)で、エンゲルスは『1844 年のイングランドにおける労働者階級の状態』(*The Condition of the Working Class in England*, 1844) に記している。*All Manners of Food*, pp.224-8 を参照されたい。
- 15 *Life in Victorian England*, pp.96-7 及び *All Manners of Food*, p.280 を参照されたい。
- 16 結城英雄は、「ジョイス時代のダブリン (2)」、『法政大学紀要』(第 53 号、2006)において、「当時の食事情は豊かになってきたが、粗悪品を売る店があり、冷凍設備もなかった」と記している。
- 17 上田和夫、『イディッシュ文化 東欧ユダヤ人のこころの遺産』、三省堂、1996. pp. 149-51 を参照されたい。
- 18 L:235-8 と L:470-1 を参照されたい。
- 19 マーガリンは 1860 年代にフランス人の科学者 Marie Eugène Chevreul によって発明されている。‘marge’は ‘margarine’ の短縮形である。ビタミンは 1912 年 Casimir Funk によって命名された。
- 20 宮田恭子、『ジョイス研究 家族との関係に見られる作家像』、小沢書店、1988, p.14 を参照されたい。

参考文献

Armstrong, Alison. *The Joyce of Cooking: Food and Drink from James Joyce's Dublin*. New

- York: Station Hill Press, 1986.
- Benstock, Bernard. *Critical Essays on James Joyce's Ulysses*. Boston: G.K. Hall & Co., 1989.
- Clarkson, L. A. and E. Margaret Crawford. *Feast and Famine: A History of Food and Nutrition in Ireland 1500-1920*. New York: Oxford University Press Inc., 2001.
- Ellmann, Richard. *James Joyce. New and Revised edition*. New York: Oxford University Press, 1982.
- Ferris, Kathleen. *James Joyce & the Burden of Disease*. Lexington, the University Press of Kentucky, 1995.
- Gifford, Don, with Robert J. Seidman. *Ulysses Annotated*. Second edition. New York: E.P. Dutton, 1974.
- Kemble, Frances Anne. *Journal of a Residence on a Georgian Plantation (1838-1839)*. Boston: Digireads. com, 2012.
- Hemingway, Ernest. *Selected Letters 1917-1961. edited by Carlos Baker*. New York: Charles Scribner's Sons, 1982.
- Joyce, James. *Dubliners*. New York: W. W. Norton & Company, Inc., 2006.
- . *Selected Letters of James Joyce*. Richard Ellmann, ed. London: Faber and Faber, 1975.
- . *Ulysses, edited by Hans Walter Gabler with Wolfhard Steppe and Claus Melchior*. New York: Random House, Inc., 1986.
- Levin, Harry. *The Portable James Joyce*. New York: The Viking Press, 1975.
- Maddox, Brenda. *Nora: The Real Life Molly Bloom*. Boston: Houghton Mifflin Company, 1988.
- Mennell, Stephen. *All Manners of Food: Eating and Taste in England and France from the Middle Ages to the Present*. Urbana and Chicago: University of Illinois Press, 1996.
- Murphy, John. *A Little Irish Cookbook*. Belfast: The Appletree Press Ltd., 1986.
- O'Brien, V. Joseph. *"Dear, Dirty Dublin" A City in Cistress, 1899-1916*. London: University of California Press, 1982.

- Pierse, Mary and Ann Walsh edited. *Irish Feminisms, 1810-1930: History of Feminism Volume Three*. London: Routledge, 2010.
- . *Irish Feminisms, 1810-1930: History of Feminism Volume Five*. London: Routledge, 2010.
- Reader, W. J. *Life in Victorian England. English Life Series edited by Peter Quennell*. London: B.T. Batsford Ltd, 1985.
- Shelly, Percy Bysshe. *Vindication of Natural Diet*. New York: AMS Press, 1975.
- William, Skeat. W. *An Etymological Dictionary of the English Language, 2nd ed.* Oxford: Clarendon Press, 1888.
- アト・ド・フリース著、山下主一郎主幹、荒このみ他訳、『イメージ・シンボル 辞典 Dictionary of Symbols and Imagery 』、大修館書店、1974.
- 安藤伸介他編、『イギリスの生活と文化辞典』、研究社出版、1982.
- 市川裕、『宗教の世界史 7 ユダヤ教の歴史』、山川出版社、2009.
- 上田和夫、『イディッシュ文化 東欧ユダヤ人のこころの遺産』、三省堂、1996.
- A.コーヘン著、村岡崇光訳、『タムロード入門 I 』、教文館、1997.
- A.N. ファーグノリ、M.P.ギレスピー著、ジェイムズ・ジョイス研究会訳、『ジェイムズ・ジョイス辞典』、松柏社、1997.
- 海老池俊治他訳、『筑摩世界文学大系 67 ジョイス I 』、筑摩書房、1976.
- 川口喬一、『「ユリシーズ」演技』、研究社出版、1994.
- 河野徹、『英米文学のなかのユダヤ人』、みすず書房、2001.
- 呉茂一、高津春繁訳『世界古典文学全集 I ホメーロス』、筑摩書房、1964.
- ジョイス・ジェイムズ著、高松雄一訳『ダブリンの市民』、集英社、1999.
- 、結城英雄訳『ダブリンの市民』、岩波書店、2004.
- 、大澤正佳訳『若い芸術家の肖像』、岩波書店、2007.
- 、丸谷才一他訳、『ユリシーズ 1 』、集英社、2003.

デクラン・カイバード、坂内太訳、『「ユリシーズ」と我ら 日常生活の芸術』、水声社、
2011.

宮田恭子、『ジョイス研究 家族との関係にみる作家像』、小沢書店、1988.

結城英雄、『ユリシーズの謎を歩く』、集英社、1999.

——、「ジョイス時代のダブリン（2）」、『法政大学紀要』第53号、2006.

——、「ジョイス時代のダブリン（3）」、『法政大学紀要』第54号、2007.